

薬史学文庫の設置とその意義
— 日本薬史学会創立 70 周年を記念して —

東京大学薬学図書館展示
2025 年 1 月 24 日-3 月 25 日

薬史学文庫の設置とその意義

— 日本薬史学会創立 70 周年を記念して —

< 通史編 >

はじめに	1
I. 日本薬史学会の創立	1
II. 草創期の活動	2
III. 創設者たちの逝去	4
IV. 多難な揺籃期	5
V. 明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫開設	6
VI. 進展期と名誉会員の相次ぐ逝去	8
VII. 東京大学薬学図書館に薬史学文庫移管	9
VIII. 薬史学文庫の蔵書構成	10
IX. 薬史学文庫への図書資料寄贈	12
X. 薬史学文庫の資料保存対策	13
XI. 薬史学文庫の資料展示	14
おわりに	16
注	17

< 人物編 >

山科樵作	23
清水藤太郎	24
木村雄四郎	26
根本曾代子	27
宮木高明	28
三浦三郎	29
宗田一	30
辰野高司	31

〈通史編〉

薬史学文庫の設置とその意義

— 日本薬史学会創立 70 周年を記念して —

はじめに

今を去ること 70 年前の昭和 29 (1954) 年 10 月、日本薬史学会が創設され、朝比奈泰彦が初代会長に就任した。昭和 61 (1986) 年 4 月、野上寿が日本薬史学会第 3 代会長に就任し、昭和 63 (1988) 年 10 月、明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫を開設した。

平成 3 (1991) 年 4 月、柴田承二が日本薬史学会第 4 代会長に就任した。明治薬科大学が東京都世田谷区から清瀬市に移転することに伴い、薬史学文庫は東京大学薬学図書館に設置されることになり、平成 11 (1999) 年 4 月、日本薬史学会から東京大学薬学部に寄贈された。

そこで、本展示では日本薬史学会創立 70 周年を記念して日本薬史学会創立・発展に多大の尽力を果たした方々の著作を紹介し、薬史学文庫の設置とその意義について明らかにする。

I. 日本薬史学会の創立

昭和 29 (1954) 年 4 月、京都で開催された日本薬剤師協会第 7 回薬学大会の生薬部会で佐藤文比古「江戸戯作者の売薬」、角倉一・川瀬清「商品学としての生薬学」が発表された。これは実験を伴わない研究で山科樵作は薬学に新しい研究分野の成立が必要であると痛感した。山科は清水藤太郎と意気投合して会の結成を主導し、新しい研究組織の設立に向けて有識者への説得を開始した。¹⁾

山科は第三高等学校を経て明治 40 (1907) 年 9 月、東京帝国大学医科大学薬学科に入学し、生薬学の下山順一郎の指導を受け、卒業時には優等生として恩賜の銀時計を賜った。大正元 (1912) 年 9 月三共合資会社に技師として入社し、営業部長、支配人、常務取締役、高峰研究所所長を歴任した。昭和 24 (1949) 年 5 月第一線を勇退したが、引き続き顧問として勤務し、随筆集『三共茶ばなし』を刊行し、『三共六十年史』の編纂委員長となり、「三共の生き字引」と尊称されていた。²⁾

清水は宮城県尋常中学校中退後、仙台医学専門学校薬学科教授佐野喜代作の助手に奉職し、県立宮城病院調剤員、神奈川県庁衛生技手を経て横浜・馬車道の「上記平安湯本舗・紀伊国屋薬店」の三代目となった。薬局経営の傍ら、横浜植物会に入会し、牧野富太郎、朝比奈泰彦の知遇を得た。帝国女子医学専門学校薬学科教授に招聘され、『薬局方概論』『漢方薬物学』『薬局経営及商品学』など旺盛な執筆活動を展開した。昭和 26 (1951) 年『日本薬学史』により東京大学から薬学博士の学位が授与された。³⁾

山科樵作、清水藤太郎、川崎近太郎、木村康一、木村雄四郎、宮木高明が学会創立準備世話人となり、学会発起人を募ったところ、約 140 名が賛意を表し、学会創立準備世話人が起草した日本薬史学会創立趣意書を承認した。

創立趣意書は「歴史をたずねることは単なる趣味の問題ではない」「うずもれた古来の薬学の宝を探り、新たなる発展に資したい」と述べ、最初の「非実験系」分野である薬史学を学問の領域に高める意欲と熱意が込められていた。⁴⁾

昭和 29 (1954) 年 10 月 25 日、東京大学医学部耳鼻科講堂で日本薬史学会の創立大会が開催され、山科樵作が開会挨拶、清水藤太郎が設立経過報告を行い、朝比奈泰彦が初代会長に就任した。幹事には山科樵作、清水藤太郎、木村康一、木村雄四郎、三堀三郎、高橋真太郎、吉井千代田が選任された。

朝比奈は昭和 16 (1941) 年 3 月、停年により東京帝国大学教授を退官し、昭和 18 (1943) 年 4 月、文化勲章を受章した。地衣の研究に生涯を捧げ、『日本隠花植物図鑑』『日本之地衣』を刊行した。昭和 23 (1948) 年 9 月、宮内庁の依頼を受けて朝比奈を代表とする正倉院薬物調査団が組織され、調査結果は朝比奈泰彦編『正倉院薬物』として刊行された。昭和 26 (1951) 年、牧野富太郎が自宅に保管していた標本約 50 万点を整理する「牧野博士標本保存委員会」を組織し、国庫補助金を得て整理を行った。⁵⁾

創立大会では朝比奈泰彦「正倉院の薬物について」、木村康一「本草と薬史学」、清水藤太郎「薬局方の変遷」、宮木高明「抗生物質の発展」の講演が行われ、映画「正倉院薬物」が上映され、日本薬史学会規約が定められた。⁶⁾

II. 草創期の活動

日本薬史学会の創設者たちは草創期に以下の充実した活動を行い、発展の礎を築いた。

1. 「くすり史跡めぐり」

山科樵作の提唱により「薬史研究に寄与し、会員の親睦交流を目的」として「くすり史跡巡り」が昭和 31 (1956) 年 11 月から実施された。以下のとおりで幹事、会員の豊富な見識に支えられた年中行事となった。山科樵作は参加者の目印にするため、「PHJ」と「日本薬史学会」が青地に白く染め抜かれた会旗を特注し、寄贈した。¹⁾

- 第 1 回 昭和 31 (1956) 年 11 月 18 日 江戸くすり史跡めぐり (山科樵作幹事解説)
- 第 2 回 昭和 32 (1957) 年 9 月 23 日 東京くすり史跡めぐり (三堀三郎幹事解説)
- 第 3 回 昭和 33 (1958) 年 10 月 12 日 横浜・鎌倉史跡巡遊 (三堀三郎幹事解説)
- 第 4 回 昭和 34 (1959) 年 9 月 25 日・26 日 京都・奈良の見学 (日本生薬学会共催)
- 第 5 回 昭和 35 (1960) 年 9 月 23 日 名古屋史跡巡歴 (日本生薬学会共催)
- 第 6 回 昭和 36 (1961) 年 10 月 17 日 武蔵野史跡巡歴 (三浦三郎会員解説)
- 第 7 回 昭和 37 (1962) 年 5 月 4 日 京都史跡めぐり (宗田一・高橋真太郎幹事解説)
- 第 8 回 昭和 37 (1962) 年 11 月 2 日 静岡史跡めぐり (斎藤幸男会員解説)
- 第 9 回 昭和 38 (1963) 年 7 月 14 日 千葉くすり史跡めぐり (三堀三郎幹事解説)
- 第 10 回 昭和 39 (1964) 年 9 月 20 日 金沢くすり史跡めぐり (三浦孝次会員解説)

2. 雑誌『薬局』による広報活動

日本薬史学会規約に機関誌の発行が盛り込まれていたが、当時の財政及び印刷事情により容易に実現できなかった。そこで、清水藤太郎は昭和 25 (1950) 年 1 月に創刊した

薬剤師のための雑誌『薬局』に日本薬史学会関係記事を積極的に掲載した。山科樵作、根本曾代子は薬学・薬業人の史伝を寄稿し、木村雄四郎、三堀三郎、高橋真太郎は「くすり史跡めぐり」の報告記事を執筆した。清水は雑録的記事を雑誌『薬局』の「平安堂閑話」に丹念に収録した。²⁾

3. 集談会

日本薬史学会の発足により日本薬学会の分科会として昭和 30 (1955) 年から薬史学部会が開設された。しかし、幹事会は研究水準の向上をめざし、集談会を企画した。集談会の推進役となったのは三浦三郎である。自ら官製薬書を利用した「薬史学会レポート」を発行し、近郊在住の会員に一口メモの形で時々の情報、集会の案内をした。³⁾

三浦は富山薬学専門学校を卒業後、昭和 17 (1942) 年 10 月山之内製薬に入社し、昭和 26 (1951) 年 11 月にニトロエタノールの製造特許など数件の特許を取得し、工業技術院の表彰を受けた。昭和 23 (1948) 年 7 月横隔膜手術のため国立療養所清瀬病院に入院中に『本草綱目』を徹底的に読み込み、本草の研究を志し、和漢薬、薬用植物について独自の研究を行っていた。⁴⁾

昭和 39 (1964) 年 6 月 20 日、第 1 回集談会が開催され、三浦が「常民文化から見た江戸期の薬 (その 1) 産児制限剤」、清水藤太郎が「ゲールツ伝」を発表した。同年 11 月 21 日の第 2 回集談会では三浦が「常民文化から見た江戸期の薬 (その 2) 強壯剤」、木村雄四郎が「リュードルフ・レーマン先生伝」を発表した。以後、集談会は毎年 2～3 回の頻度で開催され、三浦三郎、清水藤太郎、木村雄四郎、川瀬清、吉井千代田などが演者となり、古今東西に亘る重厚な研究発表が行われた。⁵⁾

4. 『薬史学雑誌』創刊

機関誌の発行は学会活動の重要な柱であるが、創立 12 年後の昭和 41 (1966) 年 12 月、『薬史学雑誌』が創刊された。朝比奈泰彦が題字を揮毫し、発刊之辞を述べ、村山義温 (東京薬科大学名誉学長) が「薬史学雑誌に寄せる」という所感文を寄稿した。誌面は原報、綜説、史料、随想、学会の構成であった。編集は『薬事日報』主幹、『薬事日報』編集長を務めた吉井千代田幹事が担当した。⁶⁾

創刊号の原報は三浦三郎「紫草の文献学的研究」、清水藤太郎「わが国医薬分業の失敗理由」、綜説は吉井千代田「わが国における自然科学教育の芽生えー近代薬学発祥時期の背景ー」、史料は三堀三郎「下総薬園考」、木村雄四郎「リュードノレフ・レーマン小伝」、随想は山科樵作「八十歳をこえて(遺稿)」であった。

5. くすり資料館の開設

昭和 46 (1971) 年 6 月、岐阜県羽島郡川島町にエーザイ創業者内藤豊次により「内藤記念くすり資料館」が設立された。日本初の薬に関する総合的な博物館である。日本薬史学会は内藤の要請に応じ、清水藤太郎、木村雄四郎、吉井千代田が企画・設立・運営について多大な協力を果たし、清水はこれまでに収集した和書、洋書、雑誌、著書など

約 6 千点を寄贈し、薬局にちなんで「平安堂文庫」と名付けられた。⁷⁾

Ⅲ. 創設者たちの逝去

昭和 40 年代に入ると日本薬史学会の創立に参画し、草創期の活動に多大な貢献を果たした創設者たちが相次いで逝去した。

昭和 40 (1965) 年 10 月 21 日、山科樵作が 82 歳で逝去した。日本薬史学会の「生みの親、育ての親」と評され、「くすり史跡めぐり」は山科の提唱で開始された。潤達清廉、宏量な人柄の山科は後進を懇切丁寧に指導し、博覧強記、風格ある達意の文で数々の著作を刊行した。¹⁾

昭和 45 (1970) 年 6 月 27 日、高橋真太郎が 61 歳で逝去した。大阪大学薬学部教授で日本の薬史学に理論的骨格を与えた先駆者であった。「中国の薬物療法と其影響」を著し、『明治前日本薬物学史』(昭和 33 年)に収録された。直情径行で時には寸鉄肺蹄を抉る警句を吐露する強い信念の人であった。²⁾

昭和 46 (1971) 年 7 月 2 日、赤須通美が逝去した。朝比奈泰彦門下で朝比奈と連名で「コンヴォルヴリノール酸の構造につきて」『薬学雑誌』(大正 14 年 9 月)に発表した。化研生薬株式会社代表取締役を務め、日本薬史学会の若手に物心両面の援助の手を差し伸べた。³⁾

昭和 49 (1974) 年 1 月 9 日、宮木高明が 62 歳で逝去した。千葉大学薬学部教授で多くの学術書、啓蒙書を刊行した。テレビ、新聞、雑誌を通して薬の在り方を伝える闊達で視野の広い薬学者であった。福地言一郎(三共株式会社常務取締役)は「粹な薬学博士」と評し、「歯切れのよいので定評のある学術論交や評論の中にも、そこはかたなく詩情をただよわせて物にする男」とその文章力に満腔の敬意を表した。⁴⁾

そして、昭和 50 (1975) 年 6 月 30 日、日本薬史学会初代会長の朝比奈泰彦が 94 歳で逝去した。日本薬学界の重鎮で「地衣 Lichen」の音を表す蕾軒と号し、日本薬学を世界的水準に引き上げることを理想に掲げ、その実現に邁進した生涯であった。

朝比奈の逝去により清水藤太郎が第 2 代会長に就任する予定であったが、4 月の総会直前の昭和 51 (1976) 年 3 月 1 日心不全のため、89 歳で逝去した。万卷の書を友とし、篤学力行の士でその温良な人柄は万人を魅了した。薬剤師のあるべき姿を追及し、一筋の灯を照らした生涯で不朽の業績を遺した。

昭和 52 (1977) 年 6 月 13 日、三浦三郎が 60 歳で逝去した。多年に亘り日本薬史学会の行事企画、薬史学雑誌の編集、集談会の推進役など意欲的な活動を行ない、学会の発展に多大の貢献を果たした。川瀬清(東京薬科大学教授)は「三浦先生を通じて民俗学的領域への目が開かれ、学際的視野に立つことの意義を教えて頂いた」とその逝去を惜しんだ。⁵⁾

同年 12 月 20 日、三堀三郎が 81 歳で逝去した。朝比奈泰彦門下で朝比奈と連名で「過クロール鐵によるメントーンの酸化に就て」『薬学雑誌』(大正 11 年 4 月)に発表した。戦時中は興亜院技術部に属し、木村雄四郎と南支、海南島の薬用植物、漢薬事情の調査を行い、興亜院調査報告書『南方支配と生薬事情』(昭和 17 年)を作成した。⁶⁾

IV. 多難な揺籃期

創設者たちの逝去が相次ぐ中、木村雄四郎が昭和 51 (1976) 年 4 月に日本薬史学会第 2 代会長に就任したが、人的基盤が弱体化し、多難な揺籃期を迎えることになった。

木村は京都薬学校を卒業し、東京帝国大学医学部介補に嘱託され、朝比奈泰彦の下で生薬学、植物化学を学んだ。朝比奈の推挙で東京衛生試験所技手に任官し、津村研究所に入り、薬用植物園で和漢薬用植物の試作、開発研究に尽力した。戦時中は興亜院、陸軍省などの委嘱を受け、中国各地、仏領インドシナ、タイ、マラヤ、ジャワ、スマトラ、朝鮮、台湾などで薬用植物、生薬市場の調査を行った。戦後は東京都立製薬研究所所長を務め、日本大学工学部薬学科教授に就任した。¹⁾

昭和 55 (1980) 年 4 月に日本薬学会は創立 100 年を迎えるので、日本薬学会 100 周年記念事業準備委員会(柴田承二委員長)は『日本薬学会百年史』の編纂・発行を決定した。昭和 52 (1977) 年 6 月、日本薬史学会の宗田一が編纂委員長を委嘱され、5 名の委員で編纂委員会が発足した。

宗田は官立金沢医科大学薬学専門部を卒業し、武田薬品に入社し、陸軍に入営し、千島列島松輪島に駐屯した。復員後は吉富製薬企画課に勤務し、学術部長、医薬品本部次長、調査役を歴任し。退職後は日本薬史学会、日本医史学会で意欲的な活動を行った。史料に基づき、事実を積み重ねて緻密に考証する学風は他の追随を許さず、『江戸時代の科学器械』『日本製薬技術史の研究』『近代薬物発達史』などを刊行した。²⁾

宗田は中小の項目案をたたき台として委員全体に提示し、並行して年表を作る作業を始め、記述の統一性などの調整に努めたが、昭和 54 (1979) 年 6 月委員の 1 人が執筆方針に馴染めず、辞任した。この時点では委員の補充は不可能と判断され、残る 4 人で執筆の再配分を行わざるをえなくなった。

昭和 55 (1980) 年 4 月の日本薬学会創立 100 周年記念式典に間に合わせるため、年表完成を最優先作業にし、昭和 55 (1980) 年 1 月『日本薬学会百年史年表』が完成した。本史は受稿期間を昭和 57 (1982) 年 1 月まで延ばし、同年 4 月『日本薬学会百年史』が完成した。³⁾

昭和 50 年代に入ると、財政は逼迫の度を増し、印刷費の支払いも事欠く状況に陥った。このため、昭和 54 (1979) 年度から会費を一般会員は年 1500 円から 3000 円、学生会員は 500 円から 1500 円、賛助会員は 1 万円から 1 万 5 千円に値上げした。⁴⁾

『日本薬学会百年史』は昭和 57 (1982) 年 4 月に完成したが、その直後の『薬史学雑誌』第 17 巻 1 号(昭和 57 年 6 月)の「新刊紹介・書評」で辞任した委員が『日本薬学会百年史』の内容を批判する文書を掲載した。このため、次号の『薬史学雑誌』第 17 巻 2 号(昭和 57 年 12 月)で宗田が編纂委員長として批判は事実誤認であるとして訂正記事を掲載した。

すると、『薬史学雑誌』18 巻 1 号(昭和 58 年 6 月)で辞任した委員は「『日本薬学会百年史』の論点」と題する文書を掲載し、批判を宗田の研究内容まで拡大した。その後『薬史学雑誌』で応酬が続き、收拾がつかない事態に陥った。「投稿原稿はそのまま

掲載する」という一部の常任幹事の見解が混乱の原因であった。この時期、木村会長は体調不良のため、常任幹事の吉井千代田が会長代行として事態の収拾に当たった。⁵⁾

吉井の祖父は幕末の薩摩藩士で宮内次官、枢密顧問官を務めた吉井友美、父は海軍軍人で貴族院議員の吉井幸蔵、兄は歌人の吉井勇であった。学習院高等科から東京大学医学部薬学科に入学し、薬品製造学教室で慶松勝左衛門の指導を受けた。卒業後は慶松の提案によって『薬学雑誌』の姉妹紙として創刊された『日本薬報』の編集に当たり、戦時中は慶松の懇請により医薬品統制株式会社生産部次長となった。戦後は『薬事日報』編集長を務め、日本薬史学会の創立時には幹事に選任された。⁶⁾

吉井は会員相互の交流を密にし、研究意欲を活発にするために昭和 60 (1985) 年 10 月『薬史学会通信』を創刊した。創刊号の「編集委員会公告」で薬史学雑誌の編集について「投稿原稿の増加を促進する目的もあって、特に主体的編集方針を打出さず、投稿原稿は総べてそのまま掲載すること」にしていたが、薬史学の水準向上に資さない傾向の内容も出てきたので、今後は「主体的な立場を確立してその任に当り、質の高い学術雑誌への向上をはかることが必要で」とあるという新方針を提示した。⁷⁾

昭和 61 (1986) 年 4 月 3 日、千葉市で行われた日本薬学会総会で「清水藤太郎博士生誕百周年記念シンポジウム」が開催され、吉井千代田「清水先生の人物像と業績」、木村雄四郎・伊藤和洋「漢方・漢薬と清水先生」、堀岡正義「調剤学と清水先生」、江本龍雄「日本薬局方と清水先生」、青木允夫「くすり博物館と清水先生」の講演が行われた。

木村会長の時に日本薬史学会に入会した山田光男(名誉会員)は当時の雰囲気や以下のように回顧している。⁸⁾

「学会の庶務・会計などの事務は、千代田区神田駿河台の日本大学理工学部薬学科生薬学・滝戸道夫教授が担当し、学会運営は吉井千代田常任幹事が指揮した。運営幹事会は神保町の学士会館ロビーで行ったが会議中の木村会長の声が大きく、会館利用会員から「クレーム」がつくのではと、滝戸先生と冷や汗をかいたことを思い出す。会の終了後、会館食堂で木村会長を交えて幹事一同で食事をしながら会務について活発な意見交換を行った。」⁹⁾

V. 明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫開設

昭和 61 (1986) 年 4 月の日本薬史学会総会で野上寿が日本薬史学会第 3 代会長に就任した。野上は朝比奈泰彦門下で大阪帝国大学医学部附属病院薬局長、東京大学医学部助教授兼附属病院薬局長と務め、製剤学講座の初代教授に就任した。石館守三、伊藤四十二に続き、東京大学薬学部長を務め、昭和 46 (1971) 年 3 月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は日本薬剤師会副会長、日本薬学会会頭を務めた。¹⁾

野上は会長として日本薬史学会の様々な発展策を打ち出した。会則に明記されながら、実行されなかった評議員会の立ち上げを指示した。昭和 62 (1987) 年 4 月、第 1 回評議員会が評議員 26 名、幹事 10 名、その他 2 名の出席のもと開催され、機関誌の編集、会員拡大の方策などについて討議が行われた。

野上は病院薬剤部関係に多数の門下生がいたので入会を勧め、財政基盤を強化するた

め、薬業界に働きかけて賛助会員の拡大に努めた。日本薬史学会総会は日本薬学会年會時に薬史学部の会場で開催されてきたが、野上は日本薬学会と交渉し、薬史学部会を独立させ、平成2（1990）年4月星薬科大学で初めて独自の総会を開催した。

また、日本の薬史学は歴史学に立脚した通史が未完成であったので、初学者の手引きとして、宗田一理事に依頼し、「講座 薬の歴史のとらえ方」が『薬史学会通信』に11回に亘り連載された。²⁾

昭和62（1987）年4月の評議員会で大槻真一郎評議員（明治薬科大学教授）が「系統的に薬史学を勉強するために基本文献・参考資料を学会として整備」することを提案した。同年10月、明治薬科大学世田谷校大会議室で集談会が開催され、大槻真一郎「薬学史の文献資料研究をとおして見たもの—ギリシア語・ラテン語などの原典研究の体験から—」の講演が行われた。

大槻は科学史の古典研究の第一人者で『ディオスコリデス研究』『ヒポクラテス全集』などの著書・翻訳があった。講演に先立ち、中野三郎明治薬科大学学長が挨拶し、薬史学関係文献の保管・閲覧の施設として薬史学文庫を明治薬科大学に開設することを了承すると述べた。³⁾

『薬史学会通信』No.6（1988年2月）は開設前の雰囲気以下のとおり伝えている。

「明治薬科大学の大槻真一郎先生は非常に張りきっておられ、同大学・世田谷校の正面本館の2階の一室には、既に表札も掲げられ、スチール製の書棚も入り、本格的オープンを待つばかりになりました。」⁴⁾

昭和63（1988）年4月、広島で開催された日本薬史学会総会で薬史学文庫の開設が承認され、同年10月3日、明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫が開設された。

さらに、野上は学会の全国組織化を考え、手始めに西部支部設立を進め、平成2（1990）年10月13日に記念総会・講演会を大日本製薬株式会社本社で開催することになった。当日の司会・進行は米田該典幹事が担当し、野上が西部支部設立を発表することになっていた。そして、挨拶原稿の推敲を兼ねて應義義塾大学病院に検査入院したが、10月10日病状が急変し、腎不全のため、80歳で急逝した。

大日本製薬株式会社本社7階ホールに参集した出席者は野上の突然の逝去に強い衝撃を受けた。厳粛な雰囲気の中、西部支部創立総会・講演会は予定通り開催され、野上が準備した挨拶・説明の主旨を山田光男幹事が代読し、宗田一幹事「薬史研究あれこれ」、高島英伍評議員（摂南大学薬学部長）「わが国の薬学における衛生学の発展」の記念講演が行われた。⁴⁾

山田光男（名誉会員）は野上会長時代の雰囲気を以下のように回顧している。

「野上会長は従来、学士会館ロビーで行っていた運営幹事会を渋谷の薬学会館で開催することに変更られ、日本薬学会の事務局長をされた石坂哲夫幹事が会場の設営、進行を担当した。根本幹事が熱海の住まいから上京、会議に参加の記憶が残っている。幹事会終了後、野上会長、石坂哲夫幹事、江本龍雄幹事らと寄り道して酒杯を交わしながら、学会発展の方策、将来像など活発な議論を交わした記憶が残っている。」⁵⁾

VI. 進展期と名誉会員の相次ぐ逝去

野上の後任として柴田承二が平成3(1991)年4月、日本薬史学会第4代会長に就任した。柴田の祖父は近代日本薬学の創始者の柴田承桂、父は植物学者で東京帝国大学理学部教授の柴田桂太、叔父は化学者で東京帝国大学理学部教授の柴田雄次という学者一家であった。柴田は昭和51(1976)年3月、停年により東京大学薬学部教授を退官した。退官後は明治薬科大学で10年間若い研究者を育成し、平成16(2004)年12月まで14年間日本薬史学会会長を務めた。¹⁾

日本薬史学会は草創期・揺籃期を経て進展期に入った。会員数は創立時の140名から平成3(1991)年度は約300名と倍増し、『薬史学雑誌』の頁数は創刊時の約40頁から平成に入ると約100頁になった。

平成4(1992)年から平成8(1996)年まで5回に亘り、西欧・北欧・中国の研修旅行を実施した、平成5(1993)年5月の第31回国際薬史学会に山田光男、末廣雅也、高橋文会員が参加し、同年9月柴田会長が国際薬学会議の薬史学シンポジウムで「正倉院御物の化学分析」と題する講演を行うなど国際交流が推進された。

平成6(1994)年10月29日、日本薬史学会創立40周年記念講演会が日本薬学会長井記念館で開催され、難波恒夫「本草から見た薬食同源」、山川浩司「薬学教育百年の史的考察」、酒井シヅ「医薬分業反対運動の検証」、W・ゲッツ「欧日米・薬学発展の差異」の記念講演が行われた。平成7(1995)年10月、日本薬史学会編『日本医薬品産業史』が薬事日報社から刊行された。²⁾

しかし、平成8(1996)年から平成10(1998)年にかけて日本薬史学会の草創期・揺籃期を支えた名誉会員が相次いで逝去した。

平成8(1996)年7月7日、宗田一が75歳で逝去した。『薬史学雑誌』『日本医史学雑誌』『医学史研究』『医薬ジャーナル』などに健筆を振るい、数々の著作を刊行した。『図説・日本医療文化史』は畢生の大作である。その膨大な蔵書は国際日本文化研究センターに寄贈された。書籍1万3,700冊、画像資料、古地図366点などで室町時代の古医書写本、明治期の洋装本が含まれていた。漢方、蘭学、洋学、日本の医薬を中心した医事文化の全分野に及び、学問の広さと深さ、実証的な学風が反映されている。³⁾

同年9月22日、根本曾代子が92歳で逝去した。近代日本薬学を築いた柴田承桂、長井長義、下山順一郎、丹波敬三、丹羽藤吉郎、朝比奈泰彦、近藤平三郎、慶松勝左衛門、落合英二の評伝はいずれも根本の筆によるもので近代日本薬学史を研究する上で欠かすことのできない名著である。昭和55(1980)年『東京大学薬学部前史』で東京大学から薬学博士の学位が授与された。⁴⁾

同年12月31日、江本龍雄が80歳で逝去した。長崎医科大学附属薬学専門学校を卒業後、厚生省東京衛生試験所、三共株式会社、日本公定書協会に勤務した。日本薬局方の作成に貢献し、『ファルマシア』に世界の薬局方に関する論稿を発表した。『国立衛生試験所百年史』『日本薬局方百年史』の編纂にも多大な尽力を果たした。日本薬史学会では野上会長の時に常任幹事として会員管理を担当し、会員名簿の基礎を築いた。⁵⁾

平成9(1997)年1月1日、木村雄四郎が98歳で逝去した。日本薬史学会第2代会

長として多難な揺籃期の舵を取り、会長退任後の昭和 61 年 4 月、日本薬史学会名誉会員第一号に推薦された。滝戸道夫は「先生は常に深い愛情を持って学生に接し、卒業時にはお好きな「温故知新」「発奮努力、初志貫徹」の名言を達筆で色紙に書かれ銭別とされました。先生はそれを自ら実行された学者でありました」とその逝去を悼んだ。⁶⁾

平成 10 年 (1998) 年 5 月 24 日、吉井千代田が 98 歳で逝去した。「内藤記念くすり資料館」が設立に際し、企画・設立・運営について多大な協力を果たした。昭和 60 (1985) 年夏から日本薬史学会会長代行として『薬史学雑誌』編集を巡る混乱の收拾に当たり、会員相互の交流を密にする目的で『薬史学会通信』を創刊した。青木充夫 (内藤記念くすり博物館顧問) は「博物館開設後も、年に数回ご来館いただき、厳しくも実のある提案をいくつもいただきました」とその逝去を悼んだ。⁷⁾

VII. 東京大学薬学図書館に薬史学文庫移管

昭和 63 (1988) 年 4 月、薬史学文庫は明治薬科大学世田谷校に設置されたが、平成 10 (1998) 年 8 月、同大学が東京都世田谷区から清瀬市に移転したことに伴い、平成 10 (1988) 年 3 月、日本薬史学会の依頼により東京大学薬学図書館に設置された。

平成 11 (1999) 年 4 月、日本薬史学会会長柴田承二から東京大学薬学部長今井一洋宛に「図書および書架の寄贈について」という文書が提出され、薬史学文庫の図書とスチール製の書架 3 本が日本薬史学会から東京大学薬学部に寄贈された。

当初は利用案内が制定され、収蔵リストも公開されたが、その後は東京大学薬学図書館と日本薬史学会との連携が取れないまま、人事異動の際に薬史学文庫は日本薬史学会より預かっているという誤った引き継ぎがなされていった。その結果、収蔵図書リストは更新されないまま、未整理状態が続き、長い歳月が流れた。

平成 27 (2015) 年 7 月、当時の各種文書を確認したところ、薬史学文庫は日本薬史学会から東京大学薬学図書館に寄贈されたことが判明した。津谷喜一郎日本薬史学会会長と相談の結果、8 月下旬から 9 月中にかけて、日本薬史学会及び薬学図書館 Web サイトに掲載された薬史学文庫収蔵図書リスト (平成 11 年 3 月作成) の配列順に図書資料を並べ替え、同リストに掲載されていない「図書リスト」「樫田蔵書目録」の図書資料を確認しながらリスト (Excel 形式) を作成し、リストのない「その他の資料」を言語別、形態別に配列した。

同年 11 月 27 日、東京大学薬学図書館で日本薬史学会と第一回薬史学文庫の整理と運用に関する打合せを行った。出席者は津谷喜一郎会長、山田光男名誉会員、折原裕広報委員長、鈴木達彦総務委員 (以上、日本薬史学会)、花岡淳子図書係長、飯野洋一一般職員 (以上、東京大学薬学図書館) である。

協議の結果、薬史学文庫は東京大学薬学図書館が図書資料として管理運営し、収蔵リストを更新することなどが了承された。この日の打ち合わせに基づき、4 階閉架書庫で「薬史学文庫収蔵図書リスト」について資料と資料番号の照合作業を行い、資料番号順に並び替え、酸性劣化した資料を中性紙封筒に入れ、封筒に資料番号と書名を明示した。

平成 28 (2016) 年 3 月 16 日、東京大学薬学図書館で日本薬史学会と第二回薬史学文

庫の整理と運用に関する打合せを行った。出席者は津谷喜一郎会長、三澤美和会長代行、山田光男名誉会員、折原裕広報委員長、鈴木達彦総務委員（以上、日本薬史学会）、花岡淳子図書係長、飯野洋一一般職員（以上、東京大学薬学図書館）である。

最初に4階書庫の薬史学文庫の再整理状況を全員で確認し、協議の結果、『薬史学雑誌』『Pharmacy in history』は広く利用に供するため、キャビネットから薬学図書館の開架書架（3階閲覧室）に配架場所を変更すること、私物資料の引き取りなどが了承された。この日の打ち合わせに基づき、三澤美和会長代行から『薬史学会通信』『薬史レター』『News Letter』の欠号分が寄贈され、津谷喜一郎会長から『Pharmacy in history』『News Letter』の欠号分が寄贈された。

かくして16年の時を経て、東京大学薬学図書館と日本薬史学会が連携協力し、「薬史学文庫」は利用に供することができる状態になった。¹⁾

VIII. 薬史学文庫の蔵書構成

平成28（2016）年11月10日時点での薬史学文庫は蔵書342冊でその構成は以下のとおりであった。

1. 教科書類（薬学関係の貴重な史的価値のある教科書類）79冊
2. 薬局方関係（日本および外国の薬局方に関する図書類）31冊
3. 薬学関係者の伝記（薬学者・薬剤師・薬業者の伝記類）45冊
4. 薬学史・医学史 70冊
5. 図鑑および年表 15冊
6. 社史・研究機関史類（製薬会社の社史および研究機関史など）52冊
7. 博物館関係（医薬関係の博物館の資料類）22冊
8. 学会誌類 11冊
9. 薬史学の史料類 6冊
10. その他（辞書および薬史学以外の図書類）11冊

「1. 教科書類」には近代日本草創期の薬学教育における貴重な教科書類が収められている。

Friedrich Sandel 柴田承桂訳『公衆衛生論』明治15年は国内の所蔵館が国立国会図書館だけの稀覯本である。柴田承桂は日本薬局方制定の功労者で近代日本の薬学発展の基礎を作った人物である。同氏の以下の著書、訳書もある。

Husemann Theodor 柴田承桂訳『扶氏薬剤学 第2冊』明治15年

高橋秀松・柴田承桂『飲料水』明治20年

伊藤謙・柴田承桂・村井純之介『薬品名彙 増訂』明治16年

勝山忠雄・柴田承桂『調剤要術 改正増補4版』明治21年

柴田承桂『顕微鏡用法 第2版』明治22年

また、近代薬学の基礎を作った下山順一郎、慶松勝左衛門、清水藤太郎、額田晋、朝比奈泰彦の著書も収められている。

「2. 薬局方関係」には日本及び外国の薬局方に関係する貴重な図書が収められている。中でも、高松一男『臨牀解説陸軍薬局方 第3版』大正9年は国内の所蔵館が1館、陸軍『陸軍薬局方 第4版』昭和15年は国内の所蔵館が3館と希少価値を有し、軍事薬学研究の重要文献である。

「3. 薬学関係者の伝記」には薬学者・薬剤師・薬業者の伝記、業績目録が収められている。

江戸時代の本草学者飯沼慾斎、近代薬学の発展に多大の貢献をした明石博高、長井長義、浅井国幹、高峰讓吉、小西松柏、鈴木梅太郎、慶松勝左衛門、近藤平三郎、石津作次郎、朝比奈泰彦、板倉武、刈米達夫などの伝記、回想録がある。

「4. 薬学史・医学史」には薬学史・医学史の通史、概説書が収められている。清水藤太郎『日本薬学史』昭和24年は薬学史の古典的名著である。

以下は薬を社会文化的に考察した貴重な文献である

杉山茂『薬の社会史 第2巻～第5巻』平成14年～16年

服部昭『印籠と薬：江戸時代の薬と包装』平成22年

湯之上隆 久木田直江『くすりの小箱：薬と医療の文化史』平成23年

三浦三郎『くすりの民俗学：江戸時代・川柳にみる』昭和55年

玉川信明『風俗越中売薬：角風船・柳行李と共に』昭和48年

角田房子『碧素・日本ペニシリン物語』昭和53年は戦時中の日本におけるペニシリンの開発経緯、組織、開発状況、生産、使用状況を克明に描いている。

西川隆『「くすり」から見た日本：昭和二〇年代の原風景と今日』平成16年は昭和20年代の「くすり」を通して見た日本の原風景に焦点を当てながら、その軌跡を臨場感溢れる筆致で克明に描き、今日的課題を詳述した名著である。

「5. 図鑑および年表」にはディオスコリデス、鷺谷いづみ訳『ディオスコリデスの薬物誌』昭和58年、高取治輔『日本の薬用植物：彩色写生図』昭和41年、市村塘『日本薬用植物図譜』昭和7年など薬用植物の図鑑、Jean-Charles Sournia, Jacques Poulet, Marcel Martiny『Illustrierte Geschichte der Medizin 1-9』1980-1984、Carlo Pedrazzini『La farmacia storica ed artistica italiana』1934など医薬学史の図鑑、日本薬史学会、漢方医学の年表が収められている。

「6. 社史・研究機関史類」には大正製薬、日本メジフィジックス、藤沢薬品、田辺製薬、大日本製薬、三共、中外製薬、山之内製薬、第一製薬、森下製薬、東和薬品などの社史、岐阜薬科大学、明治薬科大学、星薬科大学、東京薬科大学、順天堂大学、国立衛生試験所などの大学史・研究所史、日本薬剤師会、富山県薬剤師会、日本漢方生薬製剤協会などの薬剤師会史などが収められている。

「7. 博物館関係」には『道修町文書目録』『宗田文庫目録』『杏雨書屋蔵書目録』『蔵書目録 和漢書の部 内藤記念くすり博物館編』『野間文庫目録』など医薬関係の博物館の資料目録が収められている。

「8. 学会誌類」には『薬史学会通信』『薬史レター』など逐次刊行物が収められ、『薬史学雑誌』『Pharmacy in history』は薬学図書館の開架書架（3階閲覧室）に配架

されている。

「9. 薬史学の史料類」の『北支関係史料』『満洲関係史料』は日中戦争期の北支・満洲における漢薬、薬草、阿片関係の製造、流過程を記した第一級史料である。また、『薬種名附覧』文化5年、『スミス氏支那薬品及天産英華字彙漢名索引』は国内未所蔵の史料である。木村雄四郎『南方薬用資源』は直筆のノートブックである。

「10. その他」には辞書及び薬史学以外の図書が収められている。栗本庸勝『明治三十五、六年東京府下ニ於ケルペスト豫防記事』明治36年は国内の所蔵館が東京大学総合図書館だけの稀観本である。¹⁾

IX. 薬史学文庫への図書資料寄贈

平成から令和に入り、日本薬史学会、東京大学大学院薬学系研究科教室などから薬史学関係の貴重な図書資料が寄贈され、薬史学文庫に収蔵した。主な寄贈資料は以下のとおりである。

1. 山川浩司（日本薬史学会第5代会長）の旧蔵書

令和2（2020）年10月、三澤美和名誉会員、小清水敏昌理事の尽力により日本薬史学会から山川浩司の旧蔵書26冊が寄贈された。

山川浩司は明治薬学専門学校を経て東京大学医学部薬学科選科を卒業し、慶應義塾大学医学部薬化学研究所助手、八幡製鉄東京研究所研究員となり、東京理科大学薬学部教授に就任し、薬品製造化学講座を担当した。『メディシナルケミストリー』（昭和59年）、『国際薬学史 東と西の医薬文明史』（平成12年）、『全国医薬史蹟ガイド』（平成16年）などの著書を刊行した。平成16（2004）年10月、柴田承二の後任として日本薬史学会第5代会長に就任し、平成24（2012）年3月まで7年半会長を務め、平成31（2019）年12月29日、91歳で逝去した。¹⁾

寄贈された図書は江戸時代の漢方薬、蘭学、明治期の薬学教育、薬学者の伝記、薬の文化誌などを内容とし、貴重な価値を有し、入手が極めて難しく、国内の図書館で所蔵されていない希少図書も含まれている。

2. 重訂本草綱目、黄帝内経素問、明治期教科書写本

令和3（2021）年6月、天然物化学教室実験室の片隅に置かれた段ボール箱から『重訂本草綱目』36冊、『黄帝内経素問』9冊、小川三之助ほか『醫科受験者必携理孝の部』、小川三之助ほか『醫科受験者必携化学篇』、下山順一郎『生薬学』、大井玄洞『生薬学』、蘇敬『新修本草』の和装本50冊が同教室大学院生の志茂将太郎によって発見された。

志茂が確認した結果、この50冊は半世紀以上前の昭和41（1966）年8月10日、衛生裁判化学教室の浮田忠之進教授から生薬学教室（天然物化学教室の前身、柴田承二教授）に寄贈されたことが判明した。

天然物化学教室と協議の結果、薬学図書館に寄贈されることになり、薬史学文庫に収蔵された。『重訂本草綱目』は寛永本の系統の版木で印刷された印年未詳本、『黄帝内経素問』は内閣文庫本（安政2年刊）に酷似している。いずれも史料的価値が高く、入手

困難な稀覯本である。²⁾

3. 教科書・掛図

令和 5 (2023) 年 4 月、薬化学教室の大和田智彦教授から昭和 10 年代から 30 年代の教科書 20 冊が寄贈された。落合英二『植物塩基』『無機薬化学』、岡本敏彦『無機化学 I』、Prodinger, Wilhelm・坂口武一『有機試薬による定量分析』、東京大学薬学科薬品分析化学教室『定量分析法 第 3 分冊 電気的並光学的分析之部』、秋元健『有機化学 I-III』などでいずれも謄写版である。

令和 6 (2024) 2 月、薬化学教室の大和田智彦教授から掛図 6 点が寄贈された。掛図は明治期の東京帝国大学医科大学薬学科時代から生薬学教室の下山順一郎教授の授業で使用され、大正期には薬品製造学教室の慶松勝左衛門教授の指示で助手が徹夜で作成した。寄贈された掛図は放射線化学、炭素のダイヤモンド構図、周期表の電子数の変化、原子の体積などの無機化学で昭和 30 年代から 40 年代にかけて薬化学教室の落合英二教授、岡本敏彦教授が授業で使用したと推定される。

4. 『日本薬報』の CD

令和 5 (2023) 年 11 月、山内盛東京生薬協会理事と小清水敏昌理事から『日本薬報』の CD が寄贈された。収録期間は大正 15 (1926) 年 1 月 5 日から昭和 17 (1942) 年 12 月 20 日である。誌面は評論、講壇、薬苑、薬業、文芸、趣味、雑録など多岐にわたる項目で構成され、多彩で充実した記事が掲載されている。

山内理事の恩師である木村雄四郎 (日本薬史学会第 2 代会長) が所蔵していた『日本薬報』原本を杉山潔 (小田原市の漢方専門薬局「翠嵐」) が保管していた。山内理事が杉山から『日本薬報』原本を寄贈され、保存と利用に供するため、CD を作製した。

明治 14 (1881) 年に創刊された『薬学雑誌』は薬学研究の専門誌として薬学の進歩に貢献してきたが、一般会員向きの平明な定期刊行物を要望する声が高まっていた。そこで、大正 15 (1926) 年 1 月慶松勝左衛門の提案によって『日本薬報』が『薬学雑誌』の姉妹紙として創刊された。明治・大正期に薬学研究は進捗し、薬学教育も普及した。また、薬事制度の整備も進み、製薬業も勃興し、近代日本の薬学は発展期を迎えていたことがその背景にあった。³⁾

X. 薬史学文庫の資料保存対策

1. 図書資料の修復

薬史学文庫には明治・大正期の図書資料が数多くあり、これらは歴史的価値を有している。しかし、酸性劣化による損傷が甚だしく、利用に供することのできないものが多い。国内の図書館で所蔵されていない図書資料も含まれているので、資料保存対策を早急に講じることが喫緊の課題となった。そこで、専門業者に委託し、劣化損傷が甚だしい図書資料の修復を行った。

令和 2 (2020) 年度の修復実績

公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団から 50 万円の助成を受け、株式会社資料保存器材に委託し、劣化損傷が著しい薬史学文庫の図書資料を修復した。

Hesseman Theodor 柴田承桂訳『扶氏薬剤学 第2冊』、勝山忠雄・柴田承桂『調剤要術 改正増補4版』、藤田正方『東京薬舗学校教科書 物理学之部』、丹波敬三『有機化学前編・後編』、中山忠直『漢方医学の新研究』、清水藤太郎『漢方薬の話』、清水藤太郎『日本薬学史』など28冊である。¹⁾

さらに、薬学系研究科臨時経費 50 万円、図書委員会経費 40 万円で株式会社資料保存器材に委託し、劣化損傷が著しい薬史学文庫の図書資料を修復した。

『薬種名附覧』、『北支関係史料』、『満洲関係史料』、松村任三『植物器官学』、木村雄四郎『南方薬用資源』、高橋秀松・柴田承桂『飲料水』、下山順一郎・柴田桂太『薬用植物学：全』、下山順一郎・近藤平三郎『製薬化学』上、下山順一郎・朝比奈泰彦・藤田直市『生薬学：全』、伊沢凡人『薬学の在り方の分析』など26冊である。

令和4(2022)年度の修復実績

公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団から 100 万円の助成を受け、株式会社資料保存器材に委託し、天然物化学教室実験室から寄贈された『重訂本草綱目』36冊、『黄帝内经素问』9冊、小川三之助ほか『医科受験者必携理孝の部』、小川三之助ほか『医科受験者必携化学篇』、下山順一郎『生薬学』、大井玄洞『生薬学』、蘇敬『新修本草』の和装本 50 冊を修復した。

令和6(2024)年度の修復実績

薬学系研究科臨時経費 70 万円で株式会社資料保存器材に委託し、薬化学教室の大和田智彦教授から寄贈された掛図 6 点(放射線化学、炭素のダイヤモンド構図、周期表の電子数の変化、原子の体積などの無機化学)を修復した。

2. 復刻出版

資料保存対策として歴史的価値を有する貴重な図書資料の復刻出版を促進することも急務である。復刻出版とは所蔵図書資料を底本として、当該著作物の全体を写真または活字等により復刻することである。

『北支関係史料』『満洲関係史料』は興亜院の委嘱により生薬学者の刈米達夫が日中戦争下の北支と満洲の漢薬資源調査を行った際の復命書および関連文書である。蒙疆地区の阿片関係資料も含まれ、極めて史料的价值が高いが、劣化損傷が著しかった。

そこで、不二出版株式会社に復刻出版を依頼し、令和3(2021)年11月『東京大学薬学図書館薬史学文庫所蔵「北支関係・満洲関係」綴』(全3冊)として出版された。²⁾

XI. 薬史学文庫の資料展示

東京大学薬学図書館は令和4(2022)年度から2階閲覧室で年2回、所蔵資料の展示を開催しているが、薬史学文庫の資料も展示で紹介した。

1. 刈米達夫 戦時下中国の漢薬調査 令和4(2022年)4月1日～6月30日

薬史学文庫の『北支関係史料』『満洲関係史料』の展示を開催した。この史料は興亜院の委嘱により生薬学者の刈米達夫が日中戦争下の北支と満洲の漢薬資源調査を行った際の復命書および関連文書である。日中戦争期の漢薬の生産、流通等の実態はまだ十分に明らかになっていないので、この分野の歴史史料として貴重な価値を有している。また、この中に収録されている「蒙疆地区ニ於ケル阿片ニ就テ」は蒙疆地区の阿片の歴史、生産、流通の一端を明らかにする貴重な史料である。

2. 中国伝統医学に見る薬学：『黄帝内経素問』と『本草綱目』 令和5(2023)年1月17日～3月16日

薬史学文庫の『黄帝内経素問』『本草綱目』の展示を実施した。いずれも中国の伝統医学、薬学(本草学)を代表する文献として知られ、日本でも広く普及した。今回の展示資料は江戸期の日本で刊行されたものと考えられる。一般には余り馴染みのない分野であるが、近代以降の西洋医学とは異なる考え方に基づく中国伝統医学は現代の医学・薬学に新たな知見をもたらす可能性を秘めている。¹⁾

3. 近代日本における薬学の黎明—創始者たちの足跡— 令和5(2023)年6月19日～8月18日

昭和33(1958)年、東京大学医学部から独立し、東京大学薬学部が創設されたが、その源流は明治6(1873)年に新設された第一大学区医学校製薬学科に遡る。

そこに至る道のりは険しく困難で入学者が皆無になり、廃止の危機に直面したこともあった。しかし、長与専齋、柴田承桂、下山順一郎、長井長義、丹波敬三、丹羽藤吉郎は近代日本の薬学の創始者として真摯な努力を傾注し、薬学教育の基礎を築き、薬事制度の創設に貢献した。そこで、黎明期の近代薬学の足跡を辿るべく、薬学図書館が所蔵する創始者たちの著作を紹介した。¹⁾

薬史学文庫の展示資料は以下のとおりである。

Friedrich Sandel 柴田承桂訳 長与専齋校閲『公衆衛生論』明治15年

高橋秀松・柴田承桂編纂 生田秀校補『飲料水』明治20年

柴田承桂譯述『顕微鏡用法』第2版 明治22年

勝山忠雄譯補 柴田承桂校閲『調劑要術』改正増補4版 明治21年

藤田正方『東京薬舗學校教科書 物理學之部』

丹波敬三・下山順一郎・柴田承桂纂譯『有機化学』前編・後編 明治12年

Neubauer, Karl Theodor Ludwig 下山順一郎纂譯 柴田承桂校補『検尿法 完』明治14年

下山順一郎 柴田桂太増訂『薬用植物學：全』改正増補第23版 大正15年

下山順一郎 近藤平三郎増訂『製薬化学』上・下巻 改正第17版 大正15年～昭和2年

下山順一郎 朝比奈泰彦・藤田直市増補『生薬學：全』改訂増補第18版 昭和3年

4. 近代日本薬学の発展—大正から昭和 10 年代の歩み— 令和 6 (2024) 年 1 月 23 日 (火) ~3 月 22 日 (金)

明治期の東京帝国大学医科大学薬学科は下山順一郎、長井長義、丹波敬三、丹羽藤吉郎の初代教授が牽引したが、明治末年の下山の急逝に伴い、大正初頭に朝比奈泰彦助教授が継承したのが世代交代の嚆矢となった。長井、丹波、丹羽の 3 教授も大正期半ばに停年を迎え、近藤平三郎、慶松勝左衛門、服部健三、緒方章に継承された。

二代目教授は留学で習得した最新の学問を導入し、研究成果を挙げると共に完全講座制の実現、入学定員増加、建物新築、講座増設など薬学科の拡充を図り、大正から昭和 10 年代にかけて近代日本薬学はその発展期を迎えた。そこで、近代日本薬学の発展の足跡を辿るべく、薬学図書館が所蔵する資料を紹介した。

薬史学文庫の展示資料は以下のとおりである。

池口慶三・瀬川林次郎『衛生化学』増訂第 3 版 昭和 9 年

近藤平三郎・根本曾代子『藤園回想』昭和 39 年

5. 日本薬学の復興—戦中から戦後の歩み— 令和 6 (2024) 年 7 月 16 日~9 月 17 日

大正から昭和 10 年代にかけて二代目教授の慶松勝左衛門、近藤平三郎、朝比奈泰彦、服部健三、緒方章が東京帝国大学医学部薬学科を牽引し、留学で習得した最新の学問を導入し、研究分野の領域を拡大し、近代日本の薬学発展に多大な尽力を果たした。しかし、昭和 10 年代には退職の時期を迎えることになった。

三代目教授の菅澤重彦、落合英二、石館守三、秋谷七郎、浅野三千三、伊藤四十二、柴田承二、野上寿、高木敬次郎は戦中から戦後にかけて日本薬学の復興を果たし、念願の薬学部独立を実現した。そこで、日本薬学の復興の足跡を辿るべく、薬学図書館が所蔵する資料を紹介した。

薬史学文庫の展示資料は以下のとおりである。³⁾

柴田承二『薬学研究余録』平成 15 年

おわりに

どのような貴重な資料であっても整理、運用されなければ、「死蔵」のまま終わることになる。薬史学文庫も平成 10 年 3 月の設置以来、16 年余りの歳月を経て、平成 27 年に至りようやく整理の緒につき、修復を施し、利用に供することができる状態になった。今後も日本薬史学会と緊密に連携し、薬史学文庫の充実を図り、多くの研究者に利用されることを望んでやまない。

最後に満腔の謝意を込めて、薬史学文庫に貴重な図書資料をご寄贈いただいた方々のご芳名（順不同、敬称略）を挙げ、本稿の終わりとする。

柴田承二 山田光男 末広雅也 山川浩司 高島英伍 吉井千代田 江本龍雄 水野睦郎

津谷喜一郎 樫田義彦 五位野政彦 三澤美和 小清水敏昌 山内盛 大和田智彦 鳥越泰義

注

I. 日本薬史学会の創立

- 1) 川瀬清「日本薬史学会 50 年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004 年 9 月 p. 20
- 2) 根本曾代子「山科樵作先生の思い出」『薬史学雑誌』16 (2) 1981 年 12 月 p. 71-74
- 3) 根本曾代子「日本薬史学会創始の三先生素描」『ファルマシア』20 (7) 1984 年 7 月 p. 693
- 4) 西川隆「日本薬史学会誕生の時代背景—創立 70 周年「過去は未来への序章」を貫く」『薬事日報』2024 年 1 月 1 日 p. 12
- 5) 木村雄四郎「本会の創立に寄与された朝比奈泰彦、山科樵作、清水藤太郎先生の思い出」『薬史学雑誌』20 (1) 1985 年 3 月 p. 9-10
- 6) 木村雄四郎「日本薬史学会創立記事」『薬史学雑誌』4 (2) 1969 年 12 月 p. 26-28
川瀬清「日本薬史学会 50 年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004 年 9 月 p. 20-21

II. 草創期の活動

- 1) 川瀬清「日本薬史学会 50 年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004 年 9 月 p. 21-22
根本曾代子「くすり史跡めぐりと見学会抄」『薬史学雑誌』20 (1) 1985 年 3 月 p. 67-70
- 2) 川瀬清「日本薬史学会 50 年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004 年 9 月 p. 22
- 3) 同上 p. 22-23
- 4) 三浦三郎『くすりの民俗学：江戸時代・川柳にみる』健友館 1980 年 8 月 p. 277-278
- 5) 「薬史学集談会の記録」『薬史学雑誌』4 (2) 1969 年 12 月 p. 92-93
- 6) 川瀬清「日本薬史学会 50 年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004 年 9 月 p. 23
- 7) 天野宏、百瀬弥寿徳『まず薬局へおいでなさい：薬学の巨人清水藤太郎』みみずく舎 2014 年 10 月 p. 180-183

III. 創設者たちの逝去

- 1) 根本曾代子「山科樵作先生の思い出」『薬史学雑誌』16 (2) 1981 年 12 月 p. 73

- 2) 木村雄四郎「高橋真太郎博士を悼む」『薬史学雑誌』5 (1) 1970年 p.17-18
- 3) 川瀬清「日本薬史学会 50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004年9月 p.24
- 4) 宮木高明『われ茲に在るもの』廣川書店 1975年 p.3
- 5) 三浦三郎『くすりの民俗学：江戸時代・川柳にみる』健友館 1980年8月 p.4
- 6) 木村雄四郎『和漢薬の世界』創元社 1975年11月 p.285-286

IV. 多難な揺籃期

- 1) 木村雄四郎『和漢薬の世界』創元社 1975年11月 p.1-2
- 2) 長門谷洋治、坂上俊之「宗田一先生の略年譜」『日本医史学雑誌』42 (4) 1996年12月 p.627-629
- 3) 宗田一「あとがき—編纂委員会記録抄」『日本薬学会百年史』日本薬学会 1982年 p.xvii
- 4) 川瀬清「日本薬史学会 50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004年9月 p.26
- 5) 同上
- 6) 「吉井千代田先生の略歴」『薬史学雑誌』33 (2) 1998年12月 p.197-198
- 7) 「薬史学雑誌の編集について」『薬史学会通信』創刊号 1985年10月 p.3
- 8) 川瀬清「日本薬史学会 50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004年9月 p.27
- 9) 山田光男「祝：日本薬史学会 60周年」『薬史学雑誌』49 (1) 2014年6月 p.9

V. 明治薬科大学世田谷校に薬史学文庫開設

- 1) 野島庄七「名誉会員 野上壽先生の死を悼ぶ」『ファルマシア』27 (5) 1991年5月 p.506
- 2) 川瀬清「日本薬史学会 50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会 2004年9月 p.28
- 3) 「「薬史学文庫」の開設」『薬史学会通信』5 1987年10月 p.6
- 4) 「「日本薬史学会文庫」明治薬科大学(世田谷校舎)に開設」『薬史学会通信』6 1987年10月 p.1
- 5) 山田光男「祝：日本薬史学会 60周年」『薬史学雑誌』49 (1) 2014年6月 p.12-13
- 5) 同上 p.11-12

VI. 進展期と名誉会員の相次ぐ逝去

- 1) 相見則郎「菌類成分の化学から生薬学・天然物化学研究を展開した柴田承二」『薬学史事典』薬事日報社 2016年3月 p.348-350
- 2) 川瀬清「日本薬史学会 50年の歩み」『日本薬史学会五十年史』日本薬史学会

2004年9月 p.30-33

- 3) 真柳誠 「「宗田文庫披露式」報告」『日本医史学雑誌』44(4) 1998年12月 p.573-574
- 4) 山田光男 「根本曾代子博士を偲んで」『ケミカルタイムズ』1997(2) 1997年4月 p.2
- 5) 井上哲男 「江本龍雄先生を偲ぶ」『薬史学雑誌』32(1) 1997年6月 p.93-94
- 6) 滝戸道夫 「木村雄四郎先生を偲んで」『ファルマシア』33(4) p. 1997年4月 p.415
- 7) 青木充夫 「吉井千代田先生とくすり博物館」『薬史学雑誌』33(2) 1998年12月 p.198

VII. 東京大学薬学図書館に薬史学文庫移管

- 1) 飯野洋一 「薬史学文庫について」『薬史学雑誌』55(1) 2020年6月 p.93-94

VIII. 薬史学文庫の蔵書構成

- 1) 飯野洋一 「薬史学文庫について」『薬史学雑誌』55(1) 2020年6月 p.94-95

IX. 薬史学文庫への図書資料寄贈

- 1) 山田光男 「名誉会員 山川浩司先生のご逝去を悼んで」『薬史学雑誌』55(1) 2020年6月 p.101
- 2) 志茂将太郎 「薬史往来 研究室に眠っていた資料～中国本草書和刻本と明治期教科書写本～」『薬史レター』88 2022年3月 p.8
- 3) 飯野洋一 「『日本薬報』の薬史学文庫への寄贈について」『薬史レター』88 2022年3月 p.9

X. 薬史学文庫の資料保存対策

- 1) 飯野洋一 「薬史学文庫について」『薬史学雑誌』55(1) 2020年6月 p.96
- 2) 飯野洋一 「「北支関係・満洲関係」綴の復刻出版の意義とその使命について－刈米達夫の「漢薬調査」と岸修の「阿片資料」を収録－」『薬史学雑誌』56(2) 2021年12月 p.119-120

XI. 薬史学文庫の資料展示

- 1) 飯野洋一・鈴木剛紀 「東京大学薬学図書館展示「中国伝統医学に見る薬学：『黄帝内経素問』と『本草綱目』」『薬史レター』90 2023年3月 p.6-7
- 2) 「近代日本薬学の発展」を辿る 東大薬学図書館が企画展『薬事日報』2024年3月13日
- 3) 齋藤充生 「東京大学薬学図書館展示見学記」『薬史レター』93 2024年9月 p.8-9

<人物編>

山科樵作

山科樵作は明治16(1883)年11月8日、実業家で広島商工会議所会頭の山科幹三の長男として生まれた。第三高等学校を経て明治40(1907)年9月、東京帝国大学医科大学薬学科に入学した。同級生は15名で一学年上の村山義温とは生涯の盟友になった。3年時に生薬学を専修し、下山順一郎の指導を受け、明治43(1910)年7月、東京帝国大学医科大学薬学科を卒業し、優等生として恩賜の銀時計を賜った。

同年一年志願兵として広島第5師団歩兵第71連隊に入隊した。除隊後の明治45(1912)3月、私立九州薬学専門学校校長安香堯行の懇請で同校教授になり、生薬学を講義した。留任を要請されたが固辞し、大正元(1912)年9月三共合資会社に技師として入社した。大正3(1914)年7月、第一次世界大戦勃発によりドイツの医薬品の輸入が途絶し、医薬品の自給化に迫られたが、山科は清酒防腐剤サリチル酸の国産化に成功し、内務省から感謝状を贈られた。

大正10(1921)年5月、社命で欧米の薬業視察の途に上がり、工場見学、研究者との意見交換、新薬輸入の契約、新鋭の製薬機器買付けなど充実した活動を行った。大正11(1922)年11月帰国後、三共本社の営業部長になり、三共薬局開設などで才腕を振るい、目新しいソーダ・ファウンテンを付設した。

支配人、常務取締役、高峰研究所所長を歴任し、昭和24(1949)年5月第一線を勇退したが、引き続き顧問として勤務した。昭和27(1952)年4月の三共創立記念日に勤続40年の表彰を受け、随筆集『三共茶ばなし』が記念出版された。三共創業60年を記念して山科が編纂委員長となり、昭和34(1959)年に『三共六十年史』が刊行され、「三共の生き字引」と尊称された。

戦後、日本薬学会が財政困難に陥った時、率先して薬業界に働きかけ、再建に尽力し、昭和25(1950)年名誉会員に推薦された。昭和30(1955)年、山科が編纂委員長となり、『日本薬学会75年史』が刊行された。

昭和29(1954)年10月の日本薬史学会創立に際しては朝比奈泰彦、清水藤太郎と共にその中心となり、「本会の生みの親、育ての親」と評された。昭和31(1956)年11月、山科の提唱で「くすり史跡めぐり」が始まり、昭和39(1964)年9月まで10回に亘り、全国の史跡巡りが行われた。山科は参加者の目印にするため、「PHJ」と「日本薬史学会」が青地に白く染め抜かれた会旗を特注し、寄贈した。

潤達清廉、宏量な人柄の山科は後進を懇切丁寧に指導し、博覧強記、風格ある達意の文で数々の著作を刊行し、『薬学』『薬局』『薬学の領域』に近代日本薬学の創始者たちの史伝を執筆した。義太夫では「山科三太夫」の芸名を持つ域に達していた。

昭和40(1965)年10月21日、82歳で逝去した。村山義温(東京薬科大学学長)は「60年を共に歩いて来たこのよい友もなく、これからは独りで淋しく歩かねばならない痛恨事である」とその逝去を悼んだ。

清水藤太郎

清水藤太郎は明治 19 (1886) 年 3 月 30 日、宮城県仙台市の車製造業を営む長尾喜平太の長男に生まれた。荷車全盛の時代で店は繁盛していたが、明治 30 (1897) 年頃から家業が傾き、明治 33 (1900) 年 10 月家屋敷が人手に渡り、宮城県尋常中学校を中退し、筆職人に転じた。しかし、幼少期から俊秀であった藤太郎の才幹を惜しんだ姉の勧めで明治 35 (1902) 年 6 月、仙台医学専門学校薬学科教授佐野喜代作の助手に奉職した。

佐野は明治 33 (1900) 年 7 月、東京帝国大学医科大学薬学科を卒業し、同年 8 月仙台医学専門学校に赴任した新進気鋭の薬学者であった。佐野との出会いによって藤太郎の薬学への道が開かれた。有機化学・製薬化学を担当する佐野の助手を務める傍ら、講義、実習を聴講し、分析化学、鉱物学、調剤学などの勉学に精励した。

佐野の勧めで明治 38 (1905) 年 11 月、薬剤師試験に合格し、佐野が薬局長を務める県立宮城病院の調剤員として勤務することになった。さらに、明治 40 (1907) 年 5 月、佐野の推薦で神奈川県庁の衛生技手に奉職した。上司の湯浅武孫の薫陶を受け、飲食品の試験、薬品巡視に精励した。明治 44 (1911) 年 4 月、湯浅の勧めで「上記平安湯本舗・紀伊国屋薬店」を営む二代目清水榮助の婿養子になった。清水榮助は日本薬剤師会神奈川支部長を務めた人物で藤太郎を将来性のある青年と見込んでいた。

同年 8 月、「紀伊国屋薬店」を継いだ藤太郎は店名を「清水平安堂薬局」に改め、大正元 (1912) 年、店内に商品陳列用のガラスケースを置き、洋風に改装した。薬局経営に関する外国書籍を収集し、ドイツ製の新薬を仕入れる一方、家伝薬の平安湯、奇応丸、平熱散などの和漢薬の製剤にも力を入れた。

神奈川県薬剤師会の依頼で店頭には横浜衛生検査所の看板を掲げ、飲食物の衛生試験の依頼に応じ、大正 2 (1913) 年には写真の現像・焼付事業を始めた。大正 8 (1919) 年には店内の一角で当時の日本では珍しかったソーダファウンテン営業、アイスクリーム製造販売を行い、流行の最先端をいく薬局であると評判を呼んだ。

薬局経営の傍ら、横浜植物会に入会し、牧野富太郎、朝比奈泰彦の知遇を得て植物採集に参加し、当時学生であった石館守三、刈米達夫と知り合った。また、ドイツ語、フランス語、オランダ語、ラテン語を独学で習得し、大正 15 (1926) 7 月朝比奈と共編で『羅和=和羅辞典：醫藥處方語：羅典語入門及處方文例』を南江堂から刊行した。

大正 12 (1923) 年 9 月の関東大震災で店は崩壊し、売薬、生薬、新薬、植物標本を全て消失したが、家族、店員は全員無事で震災後、二階建ての「平安堂薬局」を建設して再出発し、店の正面に平安堂薬局、角に平安堂写真部の看板を掲げた。

昭和 4 (1929) 年 3 月、神奈川県薬剤師会会長に就任し、約 20 年間務め、4 月には帝国女子医学専門学校薬学科教授に招かれ、調剤学、薬局経営学、薬学ラテン語などを講義し、柔和な表情と抑揚のある語り口で女子学生を魅了した。戦後も習志野に移転した東邦大学薬学部教授を務め、約 40 年間に亘り薬剤師の育成に努めた。

昭和期に入ると旺盛な執筆活動を展開し、『薬局方概論』『漢方薬物学』『本草辞典』『薬局経営及商品学』『調剤学概論』『国民保健と皇漢薬』『漢方掌典』『国医薬物学研究』『清水調剤学』を刊行した。昭和11年(1936)4月、日本薬局方公布五十年を記念して刊行された『日本薬局方五十年史』の執筆編集はほとんど一人で担当した。

古方派の湯本求真に師事して漢方医学の臨床を学び始め、昭和9(1934)年に同門の士と日本漢方医学会を結成、月刊誌『漢方と漢薬』を創刊し、多数の論説を発表した。昭和10(1935)年に結成された借行学苑の漢方医学講座で漢方薬物学などを講述し、昭和16(1941)年10月大塚敬節、矢数道明、木村長久と共著で『漢方診療の実際』を刊行し、漢方復興に大きな貢献を果たした。戦時中は中国、満洲、蒙古で漢薬調査を行い、『満洲国漢薬典』の編集に参画した。

昭和20(1945)5月の横浜空襲で「平安堂薬局」は全焼した。戦後は占領軍に馬車道一帯の土地を接収され、横浜駅前の仮店舗で営業したが、昭和30(1955)年土地が返還されたので、「平安堂薬局」は新社屋を建設し、翌31(1956)年1月薬局を再開した。

昭和23(1948)年9月宮内府図書頭から正倉院御物中の薬物調査の依頼があり、朝比奈泰彦を代表とする正倉院薬物調査団が構成され、藤太郎も参加した。昭和30(1955)年12月、その調査結果として朝比奈泰彦編『正倉院薬物』が刊行され、「正倉院薬物の史のおよび商品学的考察」を執筆した。

昭和24(1949)年不朽の名著『日本薬学史』を刊行し、昭和26(1951)年同書により東京大学から薬学博士の学位が授与された。昭和25(1950)年1月薬剤師のための雑誌『薬局』を創刊し、「平安堂閑話」「欧米処方箋問答」を連載し、健筆を振った。

昭和27(1952)年、日本人として初めてオランダ・ハーグの国際薬史学アカデミーから「薬学の歴史に最も精通している人」として万国薬史学アカデミー章を授与された。昭和29(1954)年10月、日本薬史学会創立大会が開催され、朝比奈泰彦が初代会長に就任した。藤太郎も幹事の一人となり、創立大会で薬局方の変遷について講演した。

昭和46(1971)年6月、岐阜県羽島郡川島町にエーザイ創業者内藤豊次により「内藤記念くすり資料館」が設立された。日本初の薬に関する総合的な博物館で藤太郎は企画・設立・運営について指導的役割を果たし、これまでに収集した和書、洋書、雑誌、著書など約6千点を寄贈し、薬局にちなんで「平安堂文庫」と名付けられた。

昭和50(1975)年3月、半世紀に亘る調査研究の集大成となる『和漢薬索引』を内藤記念くすり資料館から刊行し、和漢薬研究者の大きな指針となった。同年6月30日に朝比奈泰彦が逝去し、日本薬史学会第2代会長に就任する予定であったが、4月の総会直前の昭和51(1976)年3月1日心不全のため、89歳で逝去した。

万卷の書を友とした藤太郎は篤学力行の士でその温良な人柄は万人を魅了した。薬剤師のあるべき姿を追及し、一筋の灯を照らした生涯で不朽の業績を遺した。学生時代、植物採集を共にした石館守三はその業績に対して「あまりに恵まれた環境にあった者、又ある者に大きな教訓となる」と述べたという。

木村雄四郎

木村雄四郎は明治 31 (1898) 年 4 月、石川県金沢市に生まれた。大正 6 (1917) 年 10 月京都薬学校を卒業し、同年 11 月薬剤師試験に合格した。大正 8 (1919) 年 4 月東京帝国大学医学部介補に嘱託され、朝比奈泰彦の下で生薬学、植物化学を学んだ。朝比奈の推挙で大正 12 (1923) 年 12 月、東京衛生試験所薬用植物栽培試験部技手に任官して研鑽を重ね、大正 13 (1924) 年 12 月、津村研究所に入り、薬用植物園で和漢薬用植物の試作、開発研究に尽力した。

その後、昭和 7 (1932) 年 4 月、東京帝国大学医学部薬学科生薬学選科に入学し、翌 8 (1933) 年 3 月同科を修了し、昭和 15 (1940) 年 5 月「日本産 *Alpinia* 属植物種子の生薬学的並びに化学的研究」で薬学博士の学位を授与された。

戦時中は興亜院、陸軍省、厚生省、大東亜省、日本学術振興会、朝鮮総督府、東京帝国大学の委嘱を受け、中国各地(満洲、蒙疆、北支、中支、南支、海南島)、仏領インドシナ、タイ、マラヤ、ジャワ、スマトラ、朝鮮、台湾などで薬用植物、生薬市場の調査を行った。太平洋戦争開始後は津村研究所を辞任し、陸軍衛生材料本廠に勤務し、医薬品の現地自活対策の調査研究に従事し、昭和 19 (1944) 年 7 月から 8 月にかけて医薬品の補給対策のため、北支・蒙疆の漢薬調査を行った。

戦後は東京都立製薬研究所所長を務め、昭和 28 年 (1953) 1 月日本大学工学部薬学科教授に就任し、昭和 43 (1968) 年 3 月に定年退職するまで 15 年余り薬学教育、薬剤師養成に尽力した。退職後は北里研究所附属東洋医学総合研究所の客員教授に就任した。門下生の徳竹伯夫(日本大学理工学部薬学科教授)は木村の講義について次のように回顧している。

「講義は朗々とした大声で教室の隅々まで響くのでとても居眠りなどしてはいられない。それでも睡魔におそわれてついウトウトすると教壇を 1 回ドンと足で踏み鳴らし、それで悪童共の眠気を追拂って下さる。また黒板にたとえば次芥突きの絵などを描きながら教えて下さるのであるが、深い経験に裏打ちされた話なのでその上手な絵を見て感心しているうちにいつのまにか眠気もふっとんでしまうわけである。」

昭和 29 (1954) 年 10 月日本薬史学会創立大会が開催され、朝比奈泰彦が初代会長に就任し、木村も幹事の一人として会の発展に尽力した。昭和 50 (1975) 年 6 月朝比奈泰彦の逝去に続き、翌 51 (1976) 年 3 月清水藤太郎が逝去したことに伴い、同年 4 月に日本薬史学会第 2 代会長に就任し、昭和 60 (1985) 年まで 9 年半会長を務めた。会長退任後の昭和 61 年 4 月、日本薬史学会名誉会員第一号に推薦された。

平成 9 (1997) 年 1 月 1 日、白寿を前にして 98 歳で逝去した。木村の後任教授の滝戸道夫は「先生は常に深い愛情を持って学生に接し、卒業時にはお好きな「温故知新」「発奮努力、初志貫徹」の名言を達筆で色紙に書かれ銭別とされました。先生はそれを自ら実行された学者でありました」とその逝去を悼んだ。

根本曾代子

根本曾代子は明治 39（1906）年、東京に生まれた。昭和 5（1930）年東京女子薬学専門学校を卒業し、昭和 17（1942）年から昭和 19（1944）年まで家庭科学研究所所長を務めた。

根本は旺盛な執筆活動を展開し、近代日本薬学を築いた先覚者たちの評伝を多数刊行した。柴田承桂、長井長義、下山順一郎、丹波敬三、丹羽藤吉郎、朝比奈泰彦、近藤平三郎、慶松勝左衛門、落合英二の評伝はいずれも根本の筆によるもので近代日本薬学史を研究する上で欠かすことのできない名著である。

『薬史学雑誌』『薬局』『ファルマシア』『Chemical times』に近代日本薬学の先駆者、薬学ゆかりの外国人の史伝を数多く執筆した。特に『Chemical times』には昭和 49（1974）年 10 月から平成 7（1995）10 月までの 21 年間に 83 編を寄稿した。また、日本薬史学会の幹事として多年に亘り意欲的な活動を行ない、「くすり史跡巡り」に参加し、集談会、年会で近代日本薬学史に関する講演を幾度も行った。

昭和 55（1980）年『東京大学薬学部前史』で東京大学から薬学博士の学位が授与され、翌 56（1981）年 7 月南江堂から『日本の薬学：東京大学薬学部前史』として刊行された。吉井千代田（日本薬史学会常任幹事）は「本書の内容は著者の学位論文となったものだが、特に「東京大学薬学部前史」の“定本的”な評価に値する労作であるように思う」と評した。

根本は国立衛生試験所百年史編集委員となり、『国立衛生試験所百年史』（昭和 50 年 3 月）の本史の執筆を担当し、東京大学百年史編集委員となり、『東京大学百年史 部局史二』（昭和 62 年 3 月）の薬学部の執筆を担当した。平成 2（1990）年 4 月、その業績と学会運営の多年に亘る功績に対し、日本薬史学会名誉会員に推薦された。

晩年のある日、熱海在住の根本はいつもの和服姿で東京都文京区本郷の東京大学薬学図書館を訪れ、かつて『日薬新聞』に連載した「草薬太平記」の「柴田承桂先生の巻」「長井長義先生の巻」「下山順一郎先生の巻」「丹波敬三先生の巻」と「剤界風雲録：丹羽藤吉郎先生」の新聞切り抜きを寄贈した。詩情溢れる筆致と静謐な墨絵の挿画は画文一致の名品であり、東京大学薬学図書館の貴重な蔵書として收藏された。

平成 8（1996）年 9 月 22 日、92 歳で逝去した。青井克夫（ケミカルタイムス編集責任者）は「根本先生の原稿は科学者らしい研ぎ澄まされた簡潔な文章でいつもブルーブラックの万年筆の筆跡が鮮やかでした。原稿の締切り、字数など几帳面に守ってくださり、校正も確実に編集責任者として全幅の信頼を寄せていました」とその逝去を悼んだ。

山田光男（日本薬史学会常任理事）は「根本先生は幹事会には常に和服姿で参加され、女性らしい細やかな気配りのある、しかも積極的な発言を出されて会議をリードするのが常であった」と在りし日の思い出を偲んだ。

宮木高明

宮木高明は明治44（1911）年1月30日、東京市浅草千束町に生まれた。旧制第一高等学校を経て、昭和10（1935）年3月、東京帝国大学医学部薬学科を卒業し、近藤平三郎教授の薬化学教室の副手となった。近藤教授の退官に伴い、昭和13（1938）年3月落合英二助教授が教授、津田恭介助手が助教授になり、宮木も助手に昇任した。

宮木は入学してから間もなく「薬」について「もの」の面しか教えず、「病をいやすはたらき」について語らないので、失望を深め、懊悩した。そして、近藤教授に教えを乞うたところ、「まず有機化学を学び、そのうちに志向するところを拓け」と説かれたことを後に述懐している。昭和17（1972）年千葉医科大学附属薬学専門部教授に着任し、「Naphthyridin 誘導体の合成研究」で薬学博士を取得した。昭和24（1949）年千葉大学薬学部が発足し、初代学部長に就任した。

昭和29（1954）年10月、日本薬史学会創立大会が開催され、宮木も幹事の一人となり、創立大会で抗生物質の発展について講演した。昭和30（1955）年、「腐敗アミンの生化学研究」で日本薬学会学術賞を受賞した。昭和38（1963）年から国立予防衛生研究所食品衛生部長、昭和44（1969）年5月から千葉大学腐敗研究所所長を務め、昭和48（1973）年9月生物活性研究所に改組し、初代所長に就任した。

宮木は『薬品化学』（昭和28年）、『微生物薬品化学』（昭和34年、林誠、山岸三郎共著）の学術書と共に『薬学』（昭和25年）、『薬』（昭和32年）、『家庭の薬』（昭和35年）、『薬の正しい使い方』（昭和37年）など多くの啓蒙書を刊行し、テレビ、新聞、雑誌を通して薬の在り方を伝える闊達で視野の広い薬学者であった。

昭和39（1964）年日本薬学会会頭に就任すると共に薬学教育問題検討委員会を発足させ、薬学教育の理念を求める運動を展開し、臨床薬学の導入を提言した。昭和40（1965）年、日本薬学会会報誌『ファルマシア』を創刊し、初代委員長を務めた。昭和46（1971）年2月、薬学の入門哲学書として『薬学概論』を刊行した。同書は「薬学の理念を確立するための哲学であり、薬学独自の学問体系をどのように構築していくかの方法論でもあった」と高く評価された。

福地言一郎（三共株式会社常務取締役）は宮木について「粹な薬学博士」と評し、「歯切れのよいので定評のある学術論文や評論の中にも、そこはかとなく詩情をただよわせて物にする男」とその文章力に満腔の敬意を表した。

昭和49（1974）年1月9日、持病悪化のために教授在職中、志半ばで逝去した。62歳であった。年来の友人である津田恭介（共立薬科大学学長）は哀惜を込めて「宮木君は読みの深い布石の上手な人であったから指導的人物としてすぐれていた。勉強家で幅の広い知識を身につけていたし、温和な人柄で社交性も充分にあったから活動範囲は広く、いろいろな学界と接触しつつ薬学を引っ張って行く人物としては右に出るものは無かったかもしれない」とその逝去を悼んだ。

三浦三郎

三浦三郎は大正 6 (1917) 年 2 月 11 日、秋田県に生まれた。昭和 15 (1940) 年 3 月、富山薬学専門学校を卒業後、三菱化成工業大竹工場に勤務し、昭和 17 (1942) 年 10 月山之内製薬に入社した。本社、板橋工場に勤務し、合成化学分野の仕事をし、昭和 26 (1951) 年 11 月にはニトロエタノールの製造特許など数件の特許を取得し、工業技術院の表彰を受けた。

昭和 23 (1948) 年 7 月横隔膜手術のため国立療養所清瀬病院に入院中に『本草綱目』を徹底的に読み込み、本草の研究を志した。昭和 25 (1950) 年 12 月療養のため退職したが、昭和 33 (1958) 年 12 月小豆沢工場研究部門の常勤嘱託として復帰し、昭和 39 (1964) 年 3 月には中央研究所第 1 部勤務となった。しかし、昭和 51 (1976) 年 11 月再び清瀬の国立療養所東京病院へ入院した。昭和 52 (1977) 年 2 月定年退職し、加療を続けたが、同年 6 月 13 日、心不全のため 60 歳で逝去した。

三浦は日本薬史学会の常任幹事として多年に亘り行事企画、薬史学雑誌の編集などで意欲的な活動を行ない、学会の発展に多大の貢献を果たした。集談会の推進役となり、昭和 39 (1964) 年 6 月の第 1 回集談会では「常民文化から見た江戸期の薬、産児制限剤」を発表した。

自ら官製薬書を利用した「薬史学会レポート」を発行し、近郊在住の会員に一口メモの形で時々の情報、集会の案内をした。『薬史学会通信』創刊号 (昭和 60 年 10 月) で吉井千代田 (日本薬史学会々長代行) は「今回の「薬史学会通信は、三浦三郎先生の御遺志を継ぎ、さらに発展させようというものであります」と述べている。

三浦は和漢薬、薬用植物について独自の研究を行い、『薬史学雑誌』に「紫草の文献学的研究」「蒼耳の利用文化に関する研究」「神農伝説の展開とその儀礼民俗」「比較民族薬物論・アイヌの薬」、『和漢薬』に「武蔵野ムラサキ考」「漢方と中医薬の狭間から」「古川柳とくすり」「人参の自然発生的要因」などの論考を発表した。

昭和初期の名著、上田三平『日本薬園史の研究』の復刻に際しては、「殖産図説」と「産業漫筆—江戸紫」を新たな資料として収録し、独創的な解説を付し、「本書の価値を一層高くしている」と評された。遺稿となった『くすりの民俗学：江戸時代・川柳にみる』は古川柳に対する深い造詣に基づき、江戸庶民の生活で薬が果たした役割を考究した好著である。

川瀬清 (東京薬科大学教授) は「三浦先生を通じて民俗学的領域への目が開かれ、学際的視野に立つことの意義を教えて頂いた」、石原明 (横浜市立大学医学部助教授) は「文献と書物と実物の三者に通じるということ、さらに漢文に明るく江戸時代語もこなしながら、英・独の最新情報まで眼を通して、長野の現地まで飛んで行っては朝鮮人参の栽培を実地に指導するなど、まさに超人的仙人の貫禄十分としか表現しようはない」とその逝去を深く惜しんだ。

宗田一

宗田一は大正10(1921)年3月1日、新潟県三島郡に生まれた。昭和16(1941)年官立金沢医科大学薬学専門部を卒業し、武田薬品に入社し、十三工場内武田薬品研究室に勤務した。同年12月陸軍に入営し、千島列島松輪島に駐屯し、昭和22(1947)年復員し、武田薬品に復帰した。昭和23(1948)年、吉富製薬企画課に勤務し、学術部長、医薬品本部次長、調査役を歴任し、昭和56(1981)年退職した。

昭和29(1954)年10月の日本薬史学会創立には発起人となり、長年幹事を務め、平成5(1993)年名誉会員となった。昭和52(1977)年、日本薬学会創立百周年を記念して『日本薬学会百年史』を編纂・発行することになり、宗田が編纂委員長を委嘱された。宗田は中小の項目案をたたき台として委員全体に提示し、並行して年表を作る作業を始め、記述の統一性などの調整に努め、昭和57(1982)年完成した。

昭和31(1956)年、日本医史学会の評議員となり、理事、監事、常任理事を務め、洋学史研究会第2代会長、医学史研究会幹事、顧問などを歴任し、学会活動と多数の講演を行った。また、非常勤講師として京都薬科大学で薬学史、大阪大学医学部で医学概論、関西鍼灸短期大学で医学概論を担当した。

宗田は旺盛な執筆活動を展開し、『江戸時代の科学器械』(藪内清共編、昭和39年)、『日本製薬技術史の研究』(昭和40年)、『近代薬物発達史』(昭和49年)、『日本の名薬：売薬の文化誌』(昭和56年)、『健康と病の民俗誌：医と心のルーツ』(昭和59年)、『図説・日本医療文化史』(昭和63年)、『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』(平成5年)などを刊行し、『薬史学雑誌』『日本医史学雑誌』『医学史研究』『医薬ジャーナル』などに健筆を振るった。

京都にある自宅の書斎、廊下は膨大な史料、書籍で溢れ、愛飲家で紫煙を煙らす陶酔の一刻を楽しみ、研究の方法論、論理構成を諄々と説き、書道と絵画に堪能であった。史料に基づき、事実を積み重ねて緻密に考証する学風は他の追随を許さず、数々の著作が生まれたが、中でも『図説・日本医療文化史』は畢生の大作である。

平成7(1995)年1月の阪神淡路大震災に際し、膨大な史料、書籍が書棚から落下して散乱し、元に戻すのに難儀し、執筆中の連載も中断した。平成8(1996)年4月頃から体調を崩し、同年7月7日、75歳で逝去した。同年12月に日本医史学会、日本薬史学会、洋学研究会の合同追悼会で100名余りの会員がその逝去を悼んだ。

膨大な蔵書は国際日本文化研究センターに寄贈され、平成10(1998)年9月宗田文庫披露式が行われ、平成13(2001)年から14(2002)年にかけて『宗田文庫目録』(書籍篇・図版篇)が刊行された。

書籍1万3,700冊、画像資料、古地図366点などで室町時代の古医書写本から明治期の洋装本、各種文書、雑誌類で漢方、蘭学、洋学、日本の医薬を中心した医事文化の全分野に及び、学問の広さと深さ、実証的な学風が反映されている。

辰野高司

辰野高司は大正 12 (1923) 年 12 月 27 日、東京市駒場に生まれた。父は仏文学者の辰野隆、祖父は日本銀行、東京駅などの設計で知られる建築家の辰野金吾、母方の祖父は反射炉を設計した江川太郎左衛門であった。

辰野は昭和 17 (1942) 年 10 月東京帝国大学医学部薬学科に入学し、海軍見習尉官候補生(薬剤官)の軍歴を経て、昭和 20 (1945) 年 10 月菅澤重彦教授の薬品製造学教室の助手となり、エメチン類似化合物の合成に携わった。昭和 29 (1954) 2 月、「側鎖に環状塩基性中心を有するベンツオキノリチン類の合成研究」で薬学博士の学位を取得した。

昭和 29 (1954) 年 4 月、東京大学医学部薬理学教室の浦口健二助教授のカビ毒研究グループに入り、社会問題化していたイスランディア黄変米事件の原因菌となった毒成分の構造を柴田承二と共に解明した。

昭和 35 (1960) 年 4 月、東京理科大学に新設された薬学部教授(微生物学)に就任し、昭和 37 (1962) 年 11 月からパリ大学薬学部でフランスの薬学教育制度の調査、フランス原子力教育・研究センターでカビ毒研究に従事した。昭和 38 (1963) 年理化学研究所主任研究員を兼任し、日本産麦の赤カビの被害増大に対応するため、東京理科大学薬学部の上野芳夫教授と共にその毒素の化学的研究に従事した。

昭和 42 (1967) 年理化学研究所専任となり、カビ毒研究を続け、その成果を辰野高司・上野芳夫「マイコトキシン、殊にフザリウム属マイコトキシンの中毒学的研究」としてまとめ、昭和 52 (1977) 4 月日本薬学会学術賞を受賞した。

辰野は学生時代、有機化学一辺倒の当時の薬学に疑問を呈し、「あるべき薬学」「薬とは何か」について若い薬学者と共に研鑽を重ね、その指導的立場にあった。そして、薬学の歴史を知ることから始めるべきであるという命題の下に『日本の薬学』(昭和 41 年)、川瀬清、山川浩司と共に薬学の哲学を探る『薬学概論』(昭和 58 年)を刊行した。

刈米達夫、石館守三と共に日仏薬学会を創立し、第 3 代会長に就任し、日仏薬学の交流に務め、日本薬史学会の副会長として柴田承二第 4 代会長を補佐し、薬史学研究を支援した。また、薬学教育協議会副会長、マイコトキシン研究会会長、社会薬学研究会会長、中央薬事審議会委員などの要職を歴任した。

平成 24 (2012) 年 2 月 19 日、88 歳で逝去した。山川浩司(日本薬史学会第 5 代会長)は「当時、私も菅澤先生の元で有機合成の勉強を始め、研究室の助手であった辰野さんの魅力に当時の多くの薬学の若者とともにひきつけられた。研究室の枠を超えて集まった人々により、停電の暗闇になっても薬学の科学技術論と社会について盛んに討議が続けられた。辰野さんはまた東大薬学科内でバレーボールや野球で薬学の主力選手としても大活躍された」と在りし日の思い出を偲んだ。

薬史学文庫の設置とその意義
ー日本薬史学会創立 70 周年を記念してー

東京大学薬学図書館

2025 年 1 月 24 日

執筆 飯野 洋一（東京大学薬学図書館）

e-mail: tosho@mol.f.u-tokyo.ac.jp

tel: 03-5841-4705(ex.24705)

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
